

# 令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果 －分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について－

区名	浪速区
学校名	大阪市立敷津小学校
学校長名	本田 妙子

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和7年4月17日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に关心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

## 1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

## 2 調査内容

### (1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数
- ・理科

### (2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

## 3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・大阪市立敷津小学校では、第6学年 17名

## 令和7年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

本年度の平均正答率は、国語科、算数科、理科すべてにおいて全国平均よりも下回っている結果となつた。

国語科では、特に「話すこと・聞くこと」の項目において、全国平均を下回る結果となつた。平均無回答率は、全国と比べ高い結果となつた。

算数科では、特に「測定」の項目において、全国平均を下回る結果となつた。「データの活用」の項目においては、全国の平均正答率と比べ最も差が大きい。

理科では、特に「地球を柱とする領域」の項目においては、全国平均を下回る結果となつた。

児童質問紙では、「自分には、よいところがあると思いますか」の項目では、肯定的な回答の割合が80%を超えており、全国、大阪府とほぼ同じであった。

「人が困っているときには、進んで助けていますか」の項目については、肯定的な回答の割合がおよそ95%であり、全国、大阪府に比べて、上回る結果となつた。学校全体での取組や道徳科の授業、特別活動の時間を通して、友だちの気持ちを大切にしたり、子どもたち同士が互いに協力したりする場を設定してきた結果であるといえる。

引き続き、子どもたちが互いのよさや違いを認め合い、尊重し合える人間関係づくりを構築できるような場の設定を工夫していく、自尊感情の育成を進めていく。

## 分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

### [国語]

国語科では、全ての項目において全国平均を下回る結果となつた。書く形式の問題に関しては、無回答率が高い。正答率が最も低かったのは目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができるかどうかをみる問題であった。また、正答率が全国、大阪府よりも大幅に上回ったのは、目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけることができるかどうかをみる問題であった。

問題の意図を読み取る力などの読解力の向上を図るために、多様な言語活動を通して、他者の考えを理解するとともに、根拠を持って自分の考えを伝える力が必要である。文章に触れる機会を増やしながら、作者の伝えたいことを考えるような場を設定をしたり、「クラスのみんなに伝える」という相手意識を持たせたり、繰り返し使われている言葉から要旨をまとめたりすることが重要である。

### [算数]

算数科では、全ての項目において全国平均を下回る結果となつた。最も正答率が低く、無回答率が高かったのは、分数の加法について、共通する単位分数を見いだし、加数と被加数が、共通する単位分数のいくつ分かを数や言葉を用いて記述できるかどうかをみる「数と計算」領域の問題であった。

また、正答率に関して、全国、大阪府よりも大幅に上回っていたのは、異分母の分数の加法の計算をすることができるかどうかをみる問題であった。引き続き、デジタル教材「ナビマ」を活用し、苦手分野に関して繰り返し取り組ませていく。また、「10%増量」の意味を解釈し、「増量後の量」が「増量前の量」の何倍になっているかを表すことができるかどうかをみる問題に関しては、全国正答率に迫りつつある。

### [理科]

理科では、全ての項目において全国平均を下回る結果となつた。「生命を柱とする領域」の問題に関しては、最も平均正答率が低かった。また、身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身に付いているかどうかをみる問題では、正答率が最も低く、記述式問題のレタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点をもとに、新たな問題を見いだし、表現することができるかどうかをみる問題では、最も無回答率が高かった。

## 質問調査より

「学級の友達との間で話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」や「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか」の項目については、最も肯定的な回答の割合が全国、大阪府よりも上回っている。自分の考えや思いを自信をもって発言できるよう、お互いを認め合いながら、どんな意見も受け入れられるような雰囲気を構築していくための集団育成を図ってきた結果である。

また、「人が困っているときには、進んで助けていますか」の項目についても、肯定的な回答の割合が、およそ9.5%であり、全国、大阪府に比べて、上回っている。

さらに、「友達関係に満足していますか」の項目については、最も肯定的な回答の割合がおよそ7.0%であり、全国、大阪府に比べて圧倒的に上回っている。

「将来の夢や目標を持っていますか」「自分には、よいところがあると思いますか」の項目については、およそ8.3%であり、全国、大阪府に比べてもほとんど差はない。

## 今後の取組(アクションプラン)

本校では、友だちの話をしっかりと聞くことを大切にし、話し合い活動を軸とした教科指導を進めている。ペアやグループで意見交換をしたり、ホワイトボードやタブレット端末を活用して話し合ったりする場を設定している。その中で、子どもたちがみんなの前で説明したり解説したりすることにより、自分の理解を深め、さらに自己肯定感を高めることにもつながる。知識の習得だけではなく、子どもたちが主体性を発揮し、協働していく取組を継続して進めていく。

また、学級生活における課題や問題点を自分事として捉え、みんなで話し合ったり、考えたりすることで、子どもたち自身が自分たちの力で、学級をよりよいものへ変えることができるという見方や考え方を育成していく。

これからも、話し合い活動とICT機器を活用した教科指導を軸とする授業展開を工夫していくとともに、国籍の違いや障がいのあるなしに関わらず、互いの違いやよさを認め合い、全ての子どもたちが自分らしく自信をもって未来を切り拓いていくような取組を推進していく。